

フォーラム

道徳科への期待 ― その現状と改善への系ロ ―

報告・提案資料

日 時 2024 年 2 月 23 日（金・祝）13：00～16：00

開催形式 ハイフレックス型（対面参加またはオンライン参加）

会 場 ▶ 兵庫教育大学 神戸キャンパス 兵教ホール

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町 1-5-7 神戸情報文化ビル 3 階

オンライン ▶ Web 会議システム（Zoom）を利用

主 催 日本道徳教育方法学会

フォーラム「道徳科への期待 ― その現状と改善への糸ロ ―」
(報告・提案資料) プロローグ：授業提案

テーマ：「私たちは AI ロボットと道徳的にどう向き合うべきか」

橋本美砂子（神戸市立神戸生田中学校）

予測不可能な時代と呼ばれる今日。私たちは、人と人だけではなく、人と AI ロボットという広いダイバーシティの中を生きていく必要がある。今回は、「私たちは AI ロボットと道徳的にどう向き合うべきか？」というテーマのもと、生徒とともにこれからの時代をどのように生きていけばよいかについて考えてみたい。また、挑戦した授業実践より得られた結果と、今後の道徳科への課題について、現場からのリアルな声を届けたい。

1. 生徒の実態把握

生徒が AI ロボットをどのように捉えているか、その実態を把握するため、事前指導として、12 月に道徳科アンケート「AI ロボットと共に生きる」を実施した。

【質問項目より】

- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| ・あなたにとって、AI ロボットとは、どんな存在か？ | ・手術が必要になった時、AI ロボットに手術を頼みたいか？ |
| ・AI ロボットと友達／恋人になりたいか？ | ・ロボットに生命はあると思うか？ |
| ・AI ロボットが上司／部下にいたらうれしいか？ | ・AI ロボットと共に生きるためには…？ |

以上のような質問項目に対して、みなさんならば、どのようにお答えになるだろうか。筆者が驚いた項目を一つ挙げるならば、「ロボットに生命はあると思うか？」という質問に対して、学年の約 4 分の 1 の生徒が「ある」と答えたことだ。アンケートからは、生命の捉え方や、人と AI ロボットとの立ち位置の関係など、様々な生徒の考えが得られた。

2. 授業実践より

1 月に以下の授業実践を予定している。フォーラム当日は、2・3 時間目の授業実践を中心に発表させていただきたい。

【1 時間目】中 3 の教材「臓器ドナー」（日本文教出版）を先取りして実施

→生命の有限性、連続性について考えさせる授業

【2・3 時間目】「ピーター 2.0 サイボーグとして生きる」を教材として実施

(NHK「クローズアップ現代」2021 年 11 月 24 日(水)放送)

→AI ロボットによって、生命の有限性、連続性が揺らぐ可能性も示唆される授業

3. 実践者の立場から考えられる今後の道徳科の課題

これまで、内容項目「D-19 生命の尊さ」の中では、その連続性や有限性が大切なポイントとして考えられてきた。ところが、AI ロボットの存在によって、これまでの考え方が揺らぐ可能性が出てきたのではないだろうか。その中で、私たちは、どのように生き、そして、内容項目「D-19 生命の尊さ」をどのように捉えて授業を展開していくかが問われている。

【引用文献】

加納寛子 2020 「AI やロボットに対する小学生の意識調査」（日本情報教育学会編『情報教育』2 巻、pp. 9-16）

教育方法学の立場からの「道徳教育」の検討―「道徳科」を反転させるために―

兵庫教育大学・松田充

1. 教育方法学は「道徳教育」にいかに向かい合ってきたか

―教育方法学とは

「教育実践を対象とし、さまざまな学問分野の方法や知見を用いながら、教育実践の
解明と変革を目指す学問分野」(松下 2019, 228)

―教育方法学会大会や年次研究集会において道徳のテーマ化―過去10年の振り返り

―道徳の「教科化」に対する批判

- ・「教科化」の根拠の不明確さ
- ・政治的な意図を教育に反映させる媒体となる危険性
- ・「教科」としての不十分さ

2. 教育方法学における道徳教育論の検討

―民主教育(教育科学研究会「道徳と教育」部会)の立場から

「主体的価値選択的道徳教育」(奥平康熙)、「民主的な道徳教育」(藤田昌士)

―生活指導の立場から

「生活に根ざした道徳教育」(渡辺雅之)

―カリキュラム論の立場から

教材研究、道徳教育におけるコンピテンシー(山崎雄介、荒木寿友)

3. 「道徳科」での道徳教育への示唆

―「道徳科」での道徳教育へのまなざし

- ・道徳教育の要となることへの期待
- ・「道徳科」の内容項目や教科書を道徳教育の「準拠点」とすることへの批判

―「道徳科」を反転させるために

- ・子どもによる主体的な価値選択
- ・道徳の起点としての生活
- ・批判的な教材研究

予定参考文献

松下佳代(2019)「教育方法学の拡張と危機―教育心理学との対話の必要性―」『教育心理学
年報』58, 228-230。

藤田昌士、奥平康熙、教育科学研究会「道徳と教育」部会編(2019)『道徳教育の批判と創造
―社会転換期を拓く―』エイデル研究所。

渡辺雅之(2018)『「道徳教育」のベクトルを変える―その理論と指導―』高文研。

山崎雄介(2018)「『特別の教科』化のもとでの道徳授業」『人権と部落問題』70(4), 14-21。

荒木寿友(2019)「コンピテンシーの育成と人格の形成―道徳のコンピテンシーから導かれ
る<道徳性>の再定義―」グループ・ディダクティカ編『深い学びを紡ぎ出す―教科と
子どもの視点から―』勁草書房。

心理学等の観点から―自我関与概念の検討―

小林将太 (大阪教育大学)

本学会会則第2条には、「本会は、道徳教育の方法に関する諸問題の研究及び関連諸分野の学際的総合研究の推進を図ることを目的とする」とある。学際研究を進める上では、他の学問分野の知見等の誤解や曲解は論外として、それらの知見を批判的に吟味して正当に援用・活用することが求められる。そして、学会の存在意義が何よりもまず学術研究(＝真理の探究?)にあるとするなら、「学際的」であることは死活問題である。なぜなら、学習指導要領や行政文書は、理念や規制であって、必ずしも理論ではないからである。道徳教育方法に関する研究を学際的に推進するとは、道徳教育方法に関する検討を、関連諸分野の研究を正しく活用して、様々なレベルで批判的に展開することを意味すると言えるだろう。

そこで、筆者は「心理学等の観点」から、自我関与概念の使用について批判的に検討することをもって、道徳科を含む道徳教育(に関する学術研究)への期待を述べたい。

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議報告(2016)において例示された質の高い多様な指導方法のひとつに、「教材の登場人物への自我関与が中心の学習」(以下、「自我関与が中心の学習」)がある。報告は、自我関与概念それ自体の定義を示さなかったが、登場人物の判断や心情の類推と自分との関わりで考えることとの間を「読み物教材の登場人物に託して自らの考えや気持ちを素直に語る」ことで架橋していることから、この「登場人物に託して」「素直に語る」活動(以下、「託して」)が自我関与として捉えられているとみなせる。しかし、先行研究では自我関与(が中心の学習)について見解の相違がみられる。

自我関与研究の第一人者であった社会心理学者のシェリフ(Sherif, M.)は、自我関与を「ひとつの自我態度(あるいはその組み合わせ)の生起」と定義した。自我態度とは、人は自身を取り巻く環境に対して中立的であることはまれであり、動機に強く関わる対象や出来事、集団、価値などと関連しているという前提に立った上で、人がそれらとの関係性ごとに形成し、意識的か否かにかかわらず情意を伴う期待や関心を生み出すような態度を表す(Sherif et al. 1969 : 295-296)。北村晴朗によれば、「自我関与は内的な意識体験を示す概念ではなく、自我関与の状態とそうでないときでは、人の行動の上に明らかな差異がみられるという事実にもとづいて構成された概念である」という(北村 1957 : 230)。

道徳教育界にこの自我関与概念を導入したのは青木孝頼とみてほぼ間違いはない。「自我関与が中心の学習」も、大枠は青木による資料の活用類型における共感的活用のリバイバルである。青木における自我関与の意味は一貫して、共感的活用における「託して」であった。しかし、この意味での自我関与概念の使用は適当とは言えない。そして、現状は上述したように、自我関与概念の定義もその道徳科への適用も論者ごとに異なる。

以上から、自我関与概念は、(使用するなら)道徳科に限定せず、道徳教育全般に適用した方がよいのではないか。また、「登場人物への自我関与」も、このまま用いるなら「託して」に専従する必要はないし、「託して」を意味させるなら別の概念を使用すべきではないか。いずれにしても、こうした状況では「学際的総合研究の推進」は難しく、関連諸分野との誠実な交流と、先行研究の再検討が求められる。

(本発表はJSPS 科研費 23K12769 の助成を受けたものである。また、引用参考文献の詳細については当日の配付資料に記載する。)

教育哲学等の観点から——いい加減の道徳教育方法論のために

宮川幸奈（熊本学園大学）

道徳の教科化にあたって、従来の道徳の授業が「児童生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業」になりがちであったことが反省され、今日まで多様で効果的な指導方法が検討・提案されている。道徳の授業をより学びのあるものにしようという機運はますます高まっている。また、「何ができるようになるか」を重視する現行学習指導要領の方針に沿いつつ、コンピテンシー（資質・能力）の観点から道徳教育を論じる動きもある。道徳教育では教科化以前から、道徳的に判断したり行動したりする力の育成が目指されていたが、そのための具体的な指導方法の模索が、教育・学習全般のとらえ方の変化を受けながら進められている状況だと言えよう。本学会第7回オンラインセミナーのテーマが「道徳科における“学び”——令和の日本型学校教育とこれからの道徳（科）教育——」と設定されたことも、このような流れの中に位置づけることができるだろう（発表者はそこで、自己調整学習論と道徳教育の関連について論じる機会を得た）。

しかしながら、近年、教育哲学等において、教育論が学習や学びに焦点化することへの批判的な検討も行われている。例えば、「教育についての語りに用いられてきた語彙を「学習」や「学習者」の語彙に変形すること」を教育の「学習化 learnification」と呼ぶG・ビースタの議論〔ビースタ 2016：33〕や、「（教育は（自然）科学的に解明可能な学習の過程に還元できる）という考え方」を教育における自然主義ととらえ、それと反実在論が結び付いたもの（自然主義的反実在論）を現代の支配的な教育論とみる今井康雄の議論〔今井 2022：4〕がそれにあたる。これらの議論では、諸科学が提示する効果的な学習方法を適用してひたすら学習能力を高めることが目指されることによって、教育の目的・目標や内容が軽視されがちになり、被教育者が他者や世界と出会うことが妨げられたり、倫理的・政治的な主体として生きることが難しくなったりするといった問題が指摘されている。その指摘はとりわけ、「学習者」が「何ができるようになるか」を重視する、コンピテンシー（資質・能力）・ベースの教育論に対して向けられている。

発表者の見るところ、学習や学びに焦点化することに対して教育哲学等で指摘されている問題のすべてが、現在の道徳科の実践や道徳科に関する議論に当てはまるわけではない。ただ、道徳科においても学習・学びへの関心がますます高まる中で、学習・学びに焦点化することに対する問題提起が道徳教育方法研究に何をもたらすかを検討することには意義があると考えられる。本発表では特に、ビースタや今井が、教育や学習・学びの結果に確実さを求める傾向を批判的にとらえていることに着目する。そのうえで、道徳科の「改善」において持たれるべき視点として、道徳教育を、あるいは道徳教育方法研究をいい加減にとどめるということを挙げてみたい。

【参考文献】

- ビースタ, G. 2016 (藤井啓之・玉木博章訳) 『よい教育とはなにか——倫理・政治・民主主義』白澤社
今井康雄 2022 『反自然主義の教育思想——〈世界への導入〉に向けて』岩波書店

実践の立場から見た次代の道徳科への期待

愛媛県松山市立久枝小学校 三宅 浩司

1. 教師の創造性に関して

教科化以前の「道徳の時間」における3つの課題例の内、「道徳の時間は各教科等に比べて軽視されがち」¹⁾に対して、「令和3年度 道徳教育実施状況調査」は、一面ではその課題が克服されていることを示した。克服された要因の一つとして、使用義務のある検定教科書の導入があるが、このことは他面において、「教科書や教科書発行者の指導書に頼る傾向が見受けられるようになった」²⁾という課題を再生産したとも言える。これは、谷田が教科化を振り返りつつ、「実践の場でこれまで道徳の時間で遂行されていた何某かのことはどこかへ押し出されてしまう」³⁾と指摘していたこととつながると考える。「道徳の時間」におけるこれまでの筆者の実践や学校現場でなされてきたことを振り返りながら、「何某かのこと」を炙り出し、それが教師の「創造性」につながる重要な営みであったことを示したい。

2. 「考え、議論する道徳」に関して

先述の課題例の内、「読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導」、「発達の段階などを十分に踏まえず、児童生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせてり書かせたりする授業」⁴⁾の克服のために目指されたのが「考え、議論する道徳」であるが、その具体についてはいまだ悩ましいところがある。本シンポジウムでは、試みとして、日本学術会議から出された「(報告)道徳科において「考え、議論する」教育を推進するために」(2020)で述べられた「手続きの道徳性」に着目した筆者の実践(「手品師」A 正直, 誠実)を紹介する。実践を経て筆者が感じた素朴な問いを起点に、次代では「考え、議論する道徳」をどのように捉え、実践していくとよいかについて、それこそ「考え、議論する」材料を提供できたらと考えている。

3. 教育的関係に関して

道徳科では、教師と子どもが「共に考え、共に語り合」⁵⁾う関係が求められている。極端に言えば、「正解を知らない」という意味で、教師は子どもと同列に位置づけられるのであり、教師も子どもも「学ぶ」存在となる⁶⁾のである。しかし一方で教師は、ねらいに迫ることも求められており、ただ子どもと共に考え、語り合っていればよいというわけではない。その意味で、道徳科における教師と子どもの関係は他教科以上に複雑さを有していると言える。教育的関係という視点で筆者の実践を振り返るときに感じるいくつかの課題や可能性を踏まえ、道徳科における望ましい教育的関係の在り方を議論できたらと考えている。

¹⁾ 文部科学省(2015)「道徳教育の抜本的改善・充実」(パンフ) <https://doutoku.mext.go.jp/pdf/improvement.pdf> (2023. 12. 26 最終閲覧)

²⁾ 文部科学省(2022)「令和3年度 道徳教育実施状況調査 報告書」 https://www.mext.go.jp/content/20220427-mxt_kyoiku01-000022136_02.pdf (2023. 12. 26 最終閲覧)

³⁾ 谷田増幸(2020)「道徳科の現在, “祭り”のあとー理念と現実の乖離をどう埋めるのかー」中国四国教育学会『教育学研究ジャーナル』第25号

⁴⁾ 同上1

⁵⁾ 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編』廣済堂あかつき

⁶⁾ 小川哲哉, 上地完治, 小林万里子(2019)「学校における教育的関係の編み直しー道徳教育における教師の立ち位置に着目して」坂越正樹監修『教育的関係の解釈学』東信堂